

【報 告】

**「映画衣装制作」～千年の糸姫～
外部とのコラボレーションを通して行った映画衣装制作による
服飾造形学類学生の学び**

織田奈緒子、塚本和子、伊藤瑞香、森澤美加子、増田真理安、鬘谷 要

**“Making of Costumes for Movie” 1000 YEARS PRINCESS ITO
Learning of Student Belonging to Department of Fashion and Art
by Making of Costumes for Movie through Collaboration
with External Organization**

Naoko ORITA, Kazuko TSUKAMOTO, Mizuka ITO, Mikako MORISAWA,
Maria MASUDA, Kaname KATSURAYA

要旨

平成27年6月から9月にかけて、モナコ国際映画祭にて短編映画の作品賞受賞歴を持つ映像監督ふるいちやすし氏提案の台本に基づく長編映画の衣装制作に有志の学生を募り参加した。大学の授業内で行う個々のサイズでの一品制作とは異なり、映画の世界観や背景を考慮したデザイン提案と実際に役者が着用する衣装としての制作に取り組み、アイデアを提案する力、発想を転換する力、チームとして協力して取り組む力を育んだ。参加するにあたり、監督から構想の説明を受け、企画会議、デザイン出し、素材加工等を経て衣装の制作を行った。また実際に映画に出演する主要なキャストとのディスカッションやフィッティングなどを経て、より完成度の高い衣装を目指した。これらの活動を通して実施した実践的学習は、学生に対して臆せず自分の考えや作品をプレゼンテーションする能力を育み、大きな刺激と成長をもたらしたと考えられる。本稿では本取り組みにおける服飾造形学類学生の活動の内容と学生の様子について報告する。

キーワード：映画衣装(movie costumes)、衣装デザイン(costume design)、衣装監修(costume-direction)、共同研究(collaboration)、実践的学習(practical study)

1. はじめに

平成27年6月より、服飾造形学類の1年生から4年までの学生を対象として有志を募り、ふるいちやすし監督とのコラボレーションとなる「映画『千年の糸姫』衣装制作」に取り組んだ。平成28年3月に映画が完成し、舞台となった地域と本学学内での上映会が執り行われた（本学上映会は5月22日に実施）。ふるいちやすし監督の作品には、出演者も含め6人で作り上げ、2012年モナコ国際映画祭にて「最優秀ストーリー賞」「最優秀撮影監督賞」「最優秀音楽賞」「最優秀新人賞（主演＝笠原千尋）」の4つの賞

を受賞した『彩～ aja』や、翌2013年のモナコ国際映画祭で「最優秀アートフィルム賞」を受賞した『艶～ The color of love』の他、『サイコロコロリン』（スキップシティ国際Dシネマ映画祭入選作品）や『紫陽花』『気持ち玉』『無言歌』などがある。筆者の一人が本学に所属する以前（平成26年1月）に監督と企業の商品プロモーションのショートムービーを制作する際に衣装を制作した経緯があり今回のプロジェクトが実現した。服飾造形学類としては初めての試みであったが、監督の学生に対する教育を配慮した姿勢と熱意によって完成させることができた。新しい試みの中で、学生と教員が、監督や役者と密に関わりながらプロジェクトを完成するまでの過程、成果、課題について報告する。

2. 背景

ふるいち監督が本学学生に衣装制作を依頼するに至った背景は次の通りである。前述の通り、以前筆者の一人と映像の衣装に関わる仕事をした経緯があり当初は直接その筆者に衣装制作の依頼があった。その際に新しい取り組みとして学生の発想を生かし、映画の一部となる衣装を学生の手で制作することを提案したところ、監督にも非常に好意的に受け取られ実施に向け具体的検討を行うこととなった。そこで早急に教員側のチームを組み監督との打ち合わせを重ね、①ただ依頼されたものを淡々と作るのではなく本作品における衣装の持つ意味や映画衣装の重要性について学生に理解させること、②デザイン・パターン・素材選定・縫製に至るスケジュールと教員のサポート体制を整えること、③このプロジェクトがPDCAの流れに沿った学習になるように組み立て、最後まで教育的配慮を欠如させることなく進行できること、を重視し準備を行った。また「平和への願い」という大きなテーマを持ったこの映画が単に娯楽として受け流されることなく、文化・芸術として意味を持つものとして完成させたい、大学は研究機関であるからこの分野においても最先端を行くべきであり文化の担い手としての自覚を持ちこの作品に取り組んでほしい、という監督の強い思いを直接学生に伝えることでそれを受け学生も衣装にかける思いが一層深まった。

3. プロジェクトの流れ

- ① 監督による概要説明：映画衣装に対する考え方について、今回の作品についての概要解説
- ② 参加学生募集：監督の講演を受け有志の学生を募集、中心メンバーは2年生以上、1年生は補助として参加することも説明
- ③ 脚本に沿ったデザイン提案：中心メンバーの学生に脚本を渡し、役についてリサーチし、監督とのディスカッションを経て、どの役についてデザイン提案したいか希望を募り最終的に5グループに分けた
- ④ 1次デザイン出し：自由にデザイン画を描きプレゼンテーションを行う、教員と監督とでデザインプレゼンテーションを受け、アドバイスや方向性の修正を行い2次デザイン出しに繋げる
- ⑤ 2次デザイン出し：1次デザイン出しからブラッシュアップしたデザインを各グループから提出させプレゼンテーションを行いデザインを決定する
- ⑥ トワル組み：決定したデザインを元にトワルで形を作っていく（※トワル＝試作用の布地を指す）
- ⑦ 本布裁断・素材作り・縫製：監督・主要キャストによるトワルチェックを行い、修正点を踏まえて本布を裁断・縫製する、その過程で素材の加工やディティールの作成など役割を分担して進める
- ⑧ フィッティング：主要キャストのフィッティングを行う、監督・教員立会いのもとキャストのサイズだけでなく動き等の要素を考慮し修正点を明確にする
- ⑨ 修正・仕上げ：フィッティングの結果を踏まえて、修正し仕上げる
- ⑩ 撮影：衣装を納品して撮影に繋げる

4. 活動内容の概要と学生の様子

今回のプロジェクトは、夏休みというある程度まとまった時間を制作に充てることができたことで、授業開講時に細切れの時間を充てることなく進めることができた点で良かった。そのため、学生に対しての説明会や脚本の読み込みを6月からスタートした。今回は敢えて学年を絞ることはせずに学生を募集することに決め、その代わりその中での役割分担を明確にした。具体的には2、3年生を中心的メンバーとしメインの役所を担当、4年生はサブの役所を担当、1年生はまだ入学から半年なのでそれぞれのグループで補助的な役割とした。服飾造形学類では、実習科目に限ると1年生の和裁・洋裁の必修科目1科目ずつを除きほとんどの科目が選択制となっており、学生に一律の技術や知識が備わっていないことからグループでの作業を通して、お互いに不足している部分を補い合い、新しい提案へと繋げることを目的とした。また、学年を超えてグループにすることで普段はなかなかコミュニケーションを取りづらい縦のつながりを強化し、1年生にとっては授業外の活動を通して上級生のものづくりへの姿勢など実践的学習を通して身につける機会になると期待された。

まず映画衣装制作にあたり監督による学内講演会を開き「映画が元来はファッションをリードする存在であった時代があったこと、映画を通して文化を築き、映画はその担い手としての存在価値があること、現代ではデジタルや様々なテクノロジーの進化の中で簡略化することは簡単にできるが、その中で何を重要視するかは個人の考え方にかかっていること、この作品はそんな現代社会に対してのある意味での挑戦であること、今回の映画の大きなテーマは「平和への祈り」であること」などが学生に伝えられた。写真1-1、1-2は監督による学内講演と参加学生の様子である。



写真1-1



写真1-2

写真1-1、1-2 監督による学内講演と参加学生の様子

監督の第1回目の講演の後にメンバー募集を行い計33名の応募があった。学年の内訳は4年生2名、3年生16名、2年生5名、1年生10名である。主要メンバーで参加したい、補助で参加したいなど学生からの希望もあり、役柄や時代考証について日を改めて主要メンバー希望の学生と監督との意見交換会を行った（写真2）。ここで学生には事前に脚本を読み込み、各自の中でイメージや意見を持ち監督との意見交換会に臨むように指示した。最初はなかなか意見が出にくかったが最終的にはほぼ全員が自分のイメージや意見を伝えることができた。写真3は意見交換会の後主要メンバーと制作指導教員による集合写真である。前列左に増田助手補、森澤助手補、後列左に伊藤助教、塚本教授、後列右に織田助教。



写真2 意見交換の様子



写真3 参加した主要メンバー

意見交換によりある程度のイメージを共有することができたが、まだ学生には戸惑いが見られた。まず、第一段階として学生からの自由なデザイン提案を行った。イメージ写真を集め、そこからデザイン出しを行ったが（写真4-1、4-2）、まだ世界観を掘り下げきれておらず監督とのすり合わせを行い、修正すべき点や掘り下げるべき点を模索した（写真5）。監督とのすり合わせで、学生たちは大きなギャップを感じ更に戸惑いをみせ始めた。そこで第二段階のデザイン出しに入る前に教員側からそれぞれの役についてイメージカラーとイメージ写真の補足提案を行い、学生はそれに基づいてそこから得たインスピレーションを受け取りデザイン出しの作業に入った。ここでもう少し時間を取ることができれば、全て学生から提案されたイメージ写真より世界観をまとめあげていくことができたが、時間の関係で教員からの補足提案を加えることとなってしまったことは少々残念であった。デザイン決定後学生は各グループに分かれての作業に入り、完成を目指す。これは台本という1つの共通する材料を使用し学生の自由な発想力を鍛え、自由にアイデアを提案することと、そこから実現可能と思われる形に絞り込み、まとめる際に創造性を抑制することを極力避けることを目的としたためである。今回の課題はそこに「監督側の思い」という目に見えない制約が加わったことだが、実際に「自分のためではないものづくり」を経験する第一の関門となった。



写真4-1



写真4-2



写真5 すり合わせ風景

写真4-1、4-2 イメージ写真とデザイン画

デザインが決定し次にトワルによる試作に入る。デザイン画を元にボディーを使用し試作用の布（トワル）で形を作っていく作業である。ここで学生は「着脱」と「運動量」という衣服にとって重要な要素を考えながら「造形」というデザインをどう表現するかについて試行錯誤を繰り返した。グループ作業に移り、メンバー間や不定期で参加する補助メンバーにもスムーズに作業などのコミュニケーションやスケジュールに対する進捗を共有するツールとして、スケジュール管理シート（図1）と申し送りシート（図2）を活用した。

「千年の糸姫」衣装制作スケジュール 2015.8.20

担当役： _____
 リーダー： _____ サブリーダー： _____
 メンバー： _____

| 8月24日 | 8月25日 | 8月26日 | 8月27日 | 8月28日 |
|---------|---------|---------|---------|---------|
| 制作予定： | 制作予定： | 制作予定： | 制作予定： | 制作予定： |
| 準備するもの： | 準備するもの： | 準備するもの： | 準備するもの： | 準備するもの： |
| 出席メンバー： | 出席メンバー： | 出席メンバー： | 出席メンバー： | 出席メンバー： |

図1 スケジュール管理シート

「千年の糸姫」衣装制作 申し送りシート 2015.8.20

担当役： _____
 リーダー： _____ サブリーダー： _____
 メンバー： _____

| |
|-----------------|
| 今日進んだこと（予定に対して） |
| 明日やること |
| その他 |

図2 申し送りシート

途中監督によるトワルチェックが行われ、修正して本布での制作に入り、素材やディティール制作など役割分担をしながらキャストのフィッティングに向けて作業を進めた。写真6-1、6-2、6-3、6-4はキャストとのフィッティングの様子である。フィッティングではそれぞれ担当したキャストの「サイズ感」「着脱」「特殊な動作」「役柄のイメージ」について確認を細かく行い、ボディーに着せた静止状態と想像だけでは計り知れなかった衣装独特の要素に対する修正を行った。また、実際に着用するキャストの要望など直接打ち合わせをしながらの修正も行った(写真7)。写真8は主役の衣装のマント部分のディティール、写真9はサブキャストの衣装の素材加工部分である。撮影現場では舞台となった古民家と衣装との雰囲気もよく合っており、世界観が効果的に表現されている様子が見て取れる（写真10）。



写真6-1



写真6-2



写真6-3



写真6-4

写真6-1、6-2、6-3、6-4 フィッティングの様子



写真7 キャストと打ち合わせながらの修正作業風景



写真8 デティール



写真9 素材加工



写真10 撮影現場での着装の様子

5. 学内上映会と座談会

平成28年5月22日、オープンキャンパスの開催日程に合わせて活動報告会を兼ね学内上映会とトークショーを行った(写真11)。上映会には衣装制作に携わった学生、監督、キャスト、指導教員らが出席した。告知に際して細かい規制事項があったことから大々的には行えず、観客の動員には非常に苦慮した。それでも当日オープンキャンパスに参加していた一部の高校生も参加し、上映前に展示してある衣装を見学したり、熱心に解説に耳を傾けたりしており、服飾造形学類に関心のある高校生へのアピールができた。上映会終了度、反省会を兼ねた座談会が行われた。学生からは達成感ややり甲斐など、やりきったことへの安堵と喜びがある一方で、初めての試みの中で感じていた戸惑いや、振り返ってみて分かる改善点、コミュニケーションの取り方に対する問題点など積極的に意見が出された。特に教員側としては、具体的な活動に入る前に行った準備が十分であったかなどの点において、今後の課題が幾つか挙げられた。



写真11 上映後のトークショーの様子

6. 今後の活用

撮影終了後、制作した衣装は全て大学に返却された。上映会終了後のオープンキャンパスにて衣装展示を行うなど学類の学びとして紹介している（写真12、13）。今後は里見祭でも展示発表等を通して活動を報告できるようにと考えている。また、活動に使用した全ての記録や材料などは分類しファイリングを行いアーカイブとして保存している。このファイルはプロジェクトに参加した学生が就職活動等の際に貸し出し活用できるようにと考えている。



写真12 オープンキャンパスでの展示



写真13 オープンキャンパスでの様子

7. まとめ

平成27年6月から9月にかけて実施した「映画衣装制作」活動を通して、学生は社会で実際に行われているものづくりの形態について実践的学習を通して経験し、特に「発想力」「コミュニケーション能力」「連携力」など服飾造形学類の学びの上で大切な能力を向上させることができた。

実際の衣装制作に入るまでの準備やデザインの決定に至るまではある程度の戸惑いが見られたが、グループでの制作活動に入ると素材の選定や加工、スケジュール管理など学生が主体となって実践し、回を重ねるごとに外部の人間との意見交換の場での発言回数や内容に向上が見られた。1つ残念であったのは、学生が撮影の現場を経験できなかったことである。現場が遠方であったことや授業時間との重なりなど様々な問題があり実現できなかったが、実際の現場で学生たちが作り上げた衣装がキャストにどのようにフィットしあるいは違和感があり、照明下ではなく自然光や自然風景の中でどのように映るのかを各自の目で見て感じることは将来的に有効であったと考えられる。しかし今回の活動の中から、学生は「達成感」「喜び」「協調性」などを感じ、人間として大きく成長できた。これらの学びは、本学の目標とする「5つの力を身につける」の中、1.自分を知り誇りを持つ力、3.人を理解し自分を表現する力、4.課題を解決する力、5.社会に役立つ専門力、に対する学びとして有効であったと考えられる。

8. 終わりに

以上のような学びの活動については、学類としても初めての試みであり暗中模索の部分も大きかったが、学生にも教員にも良い刺激となった。今回の活動は単発であったが、映画衣装に限定せず、「個々の授業の関連付け」「授業内容の実践」「さらなる知識の習得」「新たな気づき」に繋げるために、様々な形での外部とのコラボレーションの実践は、学生の学びにとって大きな教育効果が期待できる。このプロジェクトでの活動が単なる経験にとどまらず、活動を通して何を学び得たか、またその成果はどう活かされるのかという「振り返り」を大切に、次のステップへと繋げていきたい。

最後に、映画『千年の糸姫』は、ロンドン・フィルムメーカー国際映画祭 2017 (International Filmmaker Festival of World Cinema LONDON 2017) の長編外国語映画部門に入選し、またアジア国際映画祭 (Asia International Film Festival) の正式招待作品にも選ばれた。本稿執筆時点 (2017年1月) で他の映画祭の審査も続いており、劇場公開に向けても意欲的に準備中である。

謝 辞

このプログラムの推進に当たり、本学の広報担当をはじめ、お世話になった学内外の多くの方々にこの場をお借りして厚く御礼申し上げます。

ご協力いただいた企業様 (敬称略)

- ・栄レース株式会社

織田奈緒子 (和洋女子大学 生活科学系 助教)
塚本 和子 (和洋女子大学 生活科学系 教授)
伊藤 瑞香 (和洋女子大学 生活科学系 助教)
森澤美加子 (和洋女子大学 生活科学系 助手補)
増田真理安 (和洋女子大学 生活科学系 助手補)
鬘谷 要 (和洋女子大学 生活科学系 教授)

(2016年10月11日受理)